慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『日本語と日本語教育』第50号刊行に際して
Sub Title	
Author	大串, 尚代(Ōgushi, Hisayo)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.3- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 特集 : 修了生の現在 寄稿
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』50：3–4（2022.3）

『日本語と日本語教育』第50号刊行に際して

国際センター所長
大串尚代

現在の本塾における日本語教育は、第二次世界大戦終了直後から始まっていたことが、『回顧と展望――慶應義塾大学国際センター設立20周年記念』（1984年）に記されている。1945年9月にGHQによって日吉校舎が接収されてしまうが、その校舎返還交渉が戦後の本塾における「国際交流」の始まりであったという。もともとは返還事業のために設置された「渉外室」が「外事部」となり、国際センター設立へと繋がっていくのだが、ここで興味深いのは本塾においては「交渉」というかたちで国際交流が始まったという事実であろう。

国際交流は、その名のとおり「交わる」ものである。こころみに手元にある広辞苑（第六版）で定義をみると、「交流」とは「1）一定時間ごとに交互に逆向きに流れる電流　2）ちがった系統のものが互いに入りまじること。また入りまじらせること」とある。互いに違う立場のものが「交渉」という場で交流する、互いの意見を交互に交わし合う――このことが本塾の国際交流の始まりだったとするならば、本塾の日本語教育が戦後数年ののちに始まったことも頷ける。アカデミックなレベルでの交渉や交流が行われるためには、本塾の学生や研究者を海外に送るだけではなく、本塾もまた海外の学生や研究者を受け入れる必要があるからだ。その意味で、海外からの留学生や研究者を受け入れるための日本語教育の重要性を、本塾は早くから理解していたと思われる。

先述の『回顧と展望』によれば、「昭和三十三年から慶應外国語学校内において日本語教育が始められた。これが現在の国際センター日本語科へと発展してゆくのである」と記されている（4 頁）。本誌『日本語と日本語教育』第 37 号（2009 年 3 月）において、「日本語教育 50 周年」として特集が組まれており、そこに収録されている齊藤修一氏の「国際センター創設当時のことを知るよすがとして」にも、当時の状況が詳細に記されている。

海外で学ぶことだけではなく、海外から来る人々に日本語や日本文化を教えること、それによってはじめて「交流」が可能になる。本塾における日本語教育・日本語研究は、国際センターの日本語科を経て、1990 年に設立された日本語・日本文化教育センターが担うことになり、現在まで多くの留学生たちが日本語や日本文化を学んできた。組織的な変更はあったものの、国際センターと日本語・文化教育センターは本塾の国際化における要であり続けてきた。そして、本塾の日本語教育および研究が継承され続けていることを示すのは、まさに本誌『日本語と日本語教育』の存在に他ならない。今号で 50 号を迎える本誌は、本塾での日本語教育に関わる人々のたゆまぬ研究の成果を発表する場であり、またその研究が引き継がれ発展し続けていることを示している。50 号にいたるまでには多くの苦労もあったのではないかと思われるが、本誌の刊行に携わった人々の日本語教育・日本文化研究への貢献ははかりしれない。50 号刊行に際し、「交渉」からはじまった本塾の国際交流の精神が、アカデミックな意見交換、学術的な交流の場である本誌に受け継がれ、今後さらに発展していくことを祈念するものである。